



写真-1 JR山陰本線・田君川橋梁のラティス桁（平成27年5月撮影）

#### ■ 珍しいラティス桁の田君川橋梁

上の写真-1は、JR山陰本線の田君川橋梁を撮ったもので、手前に咲いているのはカキツバタです。この橋梁は2径間ですが、同じ型式ではなく、左側（西側）は鋼桁、右側（東側）は長さ19.15mのラティス桁※1になっています。

※1 ラティス桁：ラティス（Lattice）は、菱形格子、あるいは組み格子を意味する。ラティス桁とは、鋼鉄製の橋桁を造る際に、一般的な鋼板の代わりにL型断面の細い鋼材を格子状に組み合わせて橋桁にしたもの。梁を構成する部材が荷重を効率よく分担するように設計することができ、これによって使用する部材の量を減らし、強度が高くて軽い梁を造ることができる。資源的には、ラティス部分を短尺材の組み合わせにより製作することができる。第1次世界大戦（1914～1918年）で国内の大型鋼板が不足した時に採用された構造で、大正7（1918）年に標準設計が制定されている。

#### ■ ラティス桁の田君川橋梁を取り上げるに至った経緯

明治45（1912）年に開通した山陰本線には古い鉄道施設が数多く残されていますが、その中に全国で3橋のみとなったラティス桁の橋のうちの2橋が但馬にあります。豊岡市竹野町の竹野川橋梁と新温泉町三谷の田君川橋梁で、今も現役で頑張っています。因みに、もう1橋はJR山口線の徳佐川橋梁です。

10年ほど前の話なので、かなり記憶が薄れていますが、確か神子畑鉄橋に関連して「鉱石の道」を調べていた時のことです。朝来市に「鉱石の道」に関する報告書があると聞いて、早速アポをとって市役所にお伺いしました。

偶々、県から朝来市に派遣されているM氏が担当課長で丁寧に教えていただきましたが、同席されていた市の職員が元国鉄マンで、話が終わってから「日本に3橋しか残っていないラティス桁の橋が、この但馬に2橋あります。竹野川橋梁と田君川橋梁です。是非、書いてください」と言われました。ちょうど田君川はバイカモだけでは4ページが埋まらなくてどうしようかと困っていた時だったので、早速調べてみることに。

ところが、よく考えてみると、豊岡から浜坂に特急「はまかせ」に乗って何度か行きましたが、岸田川は渡った記憶がありますが田君川を渡った記憶がありません。地図で確認しましたが、山陰本線は田君川と岸田川の合流点より下流で岸田川を渡っています。なのに田君川橋梁とはこれ如何に！

これはきっと田君川が付け替えられているに違いない、ということで、まずは田君川の旧河道を探すことに。

地図を見ると、現在の道の駅「浜坂の郷」付近から分岐している細い水路が約 1km 先で浜坂井土線（現・国道 178 号）を横断しています。もしここに橋があれば、橋の親柱に河川名が刻まれているかも。

後日、現地に行くと小さな橋ですが親柱があり、一方の親柱には「三谷橋」という橋名が、もう一方の親柱には「田君川」と河川名が記されていて、これで田君川の旧河道が確認できました。そこから水路に沿って下流方向に進んで行くとラティス桁の田君川橋梁が見えてきました。感動のご対面です！ここで次の疑問が湧いてきました。いつ付け替えられたのか。なぜ付け替えたのか。これらの疑問については、このあと順次説明します。

## ■ 大正 7 年の大洪水を契機に川幅を倍に広げ、それに合わせてラティス桁を増設する

田君川橋梁は、浜坂駅の東約 1km の地点に架かる 2 連の桁橋で、山陰本線建設当時、田君川がこの橋の下を流れていたようです。

当初は 1 連の桁橋として明治 44（1911）年に架けられましたが、大正 7（1918）年 9 月 13 日から 14 日にかけての台風による大洪水で被災した際に、川幅を倍に広げ、それに合わせてラティス桁を増設したものです。

この洪水では、但馬地域で大きな被害が発生し、死者 120 余人、倒壊家屋 400 戸、田地の流失・埋没 1,200 町歩（≒1,200ha）といった状況で、加えて国鉄山陰本線は、桃観隧道に山津波による土石流が流れ込み、岸田川<sup>※2</sup>は氾濫、田君川や岸田川等に架かる橋梁が被災するなど、鉄道被害が 300 余ヶ所（米子運輸事務所管内・当時は香住が分岐点）も発生しました。

山陰本線では、不通区間の早期開通に向けて昼夜兼行で復旧工事が進められました。代替輸送として、諸寄に臨時駅を設け、諸寄港から香住港まで船で連絡して交通を確保したとか。ようやく 11 月 18 日に開通しますが、応急復旧のため現場は徐行運転。その後、本格的な防災工事に着手します。

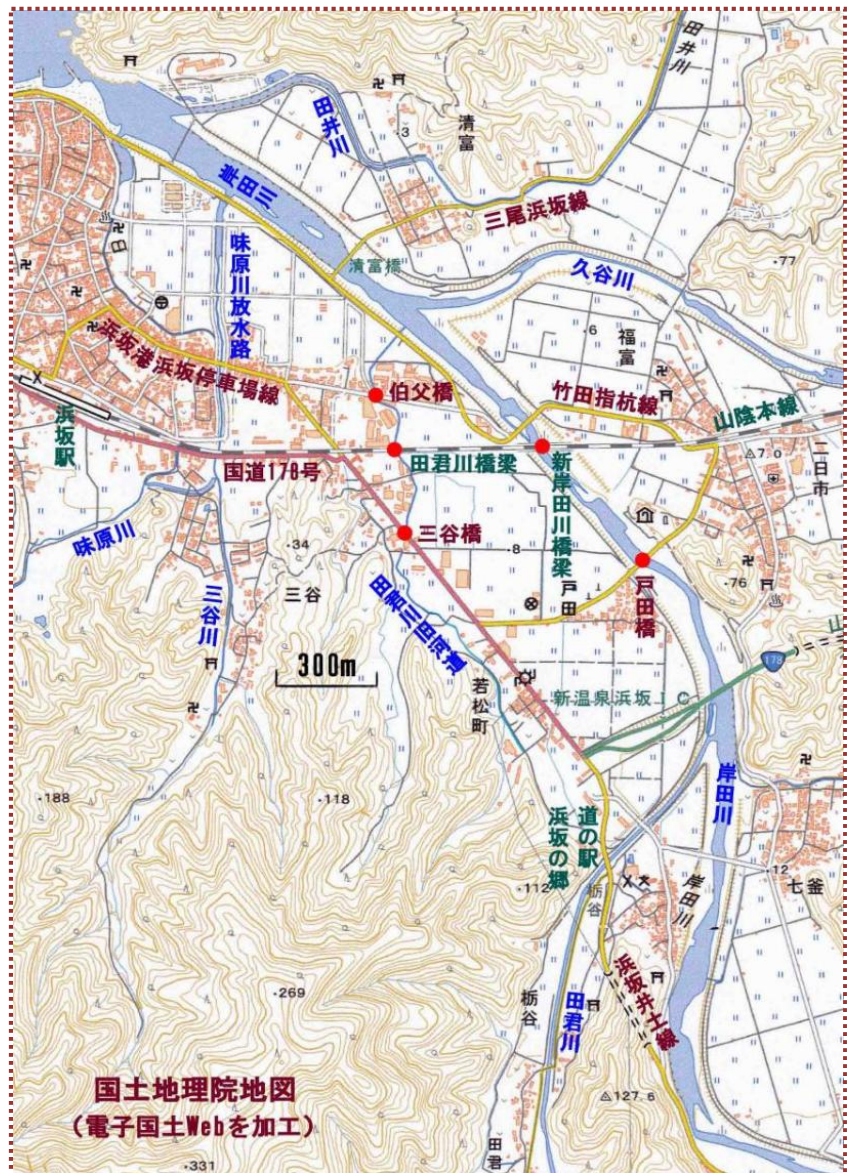


図-1 田君川および田君川旧河道周辺の地図

田君川・岸田川に関しては川幅を倍以上に拡幅することとし、大正 8（1919）年 4 月に工事を開始、大正 9（1920）年 10 月 1 日徐行運転を解除して 2 年ぶりに平常ダイヤに復帰、完全復旧となりました。

※2 岸田川：大正年間の岸田川は現在の流路ではなく、江戸時代に付け替えられた流路を流れていた。昭和 9（1934）年の室戸台風による災害からの復興時に田君川と併せて現在の流路に付け替えられた。この件については『ひょうご水百景』No.65、No.66 を参照。

## ■ 昭和9年の室戸台風災害を契機に田君川を付替え

大正7(1918)年災害により拡幅された田君川ですが、その後付け替えられ、山陰近畿自動車道(浜坂道路)大庭大橋の少し上流で岸田川に合流しています。この付け替えの原因となった洪水が、昭和9(1934)年の室戸台風です。

但馬地域では、昭和9(1934)年9月21日早朝から風雨が強まり、1日の総雨量は、浜坂で181mmを記録しました。

この豪雨による但馬全域の被害は、浸水家屋1万5千戸、倒壊・流失家屋1千戸、死者・重軽傷者362人にのぼり、農耕地の被害は、城崎郡(当時)を中心に2,700haに及びました。河川の氾濫や道路の冠水、橋梁の流失により各地で交通が途絶し、鉄道では、国鉄(現・JR)山陰本線が不通となり、田君川でも写真-2のような被害を受けました。当時、激甚災害を受けた岸田川他3河川の改修計画作成に参画した県職員OBの随想を読むと、「岸田川等の河川沿いには一枚の耕地も残さず山から山までが完全に河原と化して、所々に道路と堤防の姿が残っている状態であった。」と書かれています。



写真-2 昭和9年9月洪水による田君川の被災状況  
(国鉄山陰本線・万ヶ崎信号所付近)

この災害を契機として、岸田川では屈曲していた下流部の改修が昭和12(1937)年度に始まり、太平洋戦争で中断はあったと思いますが昭和21(1946)年度に完成しています。

田君川については、昭和10(1935)年10月1日に旧河川法に基づく準用河川に認定され、詳細は不明ですが岸田川改修に関連して田君川も県が改修することになり、現在の位置に付け替えられたのではないのでしょうか。

因みに、付け替え後の田君川に架かる「田君橋」の親柱には「昭和二十八年三月架」と刻まれていて、昭和22(1947)年に撮影された空中写真では、すでに田君川は付け替えが終わり現在の流路になっています。



写真-3 現在の田君川(岸田川合流点)



写真-4 旧田君川に架かる三谷橋



写真-5 用水路(旧田君川)前方に田君川橋梁



写真-6 旧田君川に架かる伯父橋



写真-7 伯父橋から旧田君川下流を望む

なお、田君川付け替え後、旧河道は狭められ、現在は細い用水路と化しています。旧河道のルートは図-1 のとおりで、国道 178 号・三谷橋の竣工年は橋梁台帳によると昭和 38 (1963) 年となっており、親柱には「たきみがわ」と刻まれた橋名板が付けられています。なので、付け替え後も河川名も法河川ではないにしても「田君川」のようです。さらに、田君川橋梁の下流に架かる伯父(おじ)橋の親柱にも「田君川」と刻まれています。

## ■ モノローグ

P.1 の「ラティス桁の田君川橋梁を取り上げるに至った経緯」で述べたとおり、元国鉄マンの方からラティス桁の話聞き、おかげで『ひょうご水百景』No.49 が完結しました。おまけに「岸田川が付け替えられている」ことがわかり、テーマが一つ増えました。

このように動き回ると思いもかけない、よいことがあったので、これはまさに「犬も歩けば棒に当たる」の典型例だと思い、念のため『日本語大辞典』で確認したら、意味は二つあって

- ① でしゃばると、ひどい目にあう。
- ② 出歩くと、思いもかけない、よいことがある。

正反対の意味が並んでいました。筆者は間違いなく②と思っていましたが、読者の皆さんはどちらだと思っていましたか。

ネットでもう少し調べると、本来は①の意味であったが、現在は②の意味でも用いられるとのこと。これでは、使いようがありません。

### カキツバタ (杜若)

アヤメ科アヤメ属の植物で、湿地に群生し、毎年5月から6月にかけて紫色の花を付ける。内花被片が細く直立し、外花被片(前面に垂れ下がった花びら)の中央部に白ないし淡黄色の斑紋があることなどを特徴とする。江戸時代の前半には既に多くの品種が成立しており、古典園芸植物の一つでもある。漢字表記の一つ「杜若」は、本来はヤブミョウガという別種の漢名(「とじゃく」と読む)であったが、カキツバタと混同されたものである。アヤメとよく似ているが、アヤメが比較的乾燥している場所を好むのに対し、カキツバタは湿地を好む。葉幅はアヤメのほうが狭く、カキツバタのほうが広い(ハナショウブは両者の中間)。花卉の付け根は、アヤメは網目模様、カキツバタは白い一筋の線(写真-9の赤色の破線)、ハナショウブは黄色になっている。



写真-8 田君川橋梁近くに咲いていたカキツバタ



写真-9 田君川橋梁近くに咲いていたカキツバタ

### 【参考資料】

- 1 『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課 平成 3 年 3 月
- 2 『防災学習(洪水編)～昭和 9 年 9 月室戸台風』 兵庫県 CG ハザードマップ
- 3 『近代建築 Watch～但馬の鉄道遺産』 ブログ
- 4 『村民鉄道を呪う～桃観トンネルの大惨事』 「但馬の近代化遺産」ブログ 平成 18 年 9 月  
[https://venex1.exblog.jp/page/5/#google\\_vignette](https://venex1.exblog.jp/page/5/#google_vignette)
- 5 『日本語大辞典』 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修 平成元年 12 月
- 6 『ラティス、カキツバタ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 27 (2015) 年 6 月 『ひょうご水百景』No.49

改訂：令和 8 (2026) 年 3 月 『ひょうご水百景』No.49-2